

生存科学研究ニュース

Vol. 37, No.1

2022.4 発行

発行 公益財団法人 生存科学研究所

〒104-0061 東京都中央区銀座 4-5-1

tel: 03-3563-3518 fax: 03-3567-3608 email: office@seizon.or.jp http://seizon.umin.jp

人間らしい生き方とは？

評議員 辛島 恵美子

新型コロナウイルスとの戦いは、第一回緊急事態宣言(2020年4月7日)から数えると、この4月で3年目に入る。変異の激しいウイルスとの戦いが簡単に終結するとは思わないが、早晚、行動制限が解除されるにしても、職場にはリモートワークが定着し始め、子どもの鞆にはタブレットが入る。ITやAIの急速な発達で短期間に社会を大きく変え始めている。遠隔操作でもリアルな感覚をもてる通信技術体系が構築され、関連諸制度も急速に整備されつつある。空気感染や接触感染防止の道具には便利であるが、同時に自在な情報操作、とりわけフェイク情報、フェイク動画の自由な活用にも道を拓くことをも意味しよう。現実と虚構、事実と嘘の区別などは不要になるのだろうか？ 次世代の子どもたちが適切に技術を使いこなす人間らしい人間に育つためにはどのようなサポートが必要なのだろうか。改めて、人間とはどういう存在なのか、どのように生きるべきか、素朴な原点ともいえる哲学的疑問を考え続けなければならない時代に入っているようだ。しかも、今年2月24日、ロシアはウクライナへの武力侵攻に踏み切った。歴史の中では繰り返されてきた事ではあるが、これほど高度な科学や技術を築いてきた人類だが、その思考や発想の進歩はあまりに遅々としてはいないか。日々生き残る戦いの生活の場でも、価値観や生き方、信念や信仰の違いを互いに認めあいながら共存する道を探ることは、声高に叫ばれている時代であるが、課題は山積み。さらに加えれば、日本列島は4つの動くプレート上にあり、世界屈指の地震国、火山国であり、恵みも享受しているが、自然災害への備えと対峙の精神を忘れては暮らせない中にいるはずなのだが...

日本には里山という人間とその周辺の生物たちと共存する美しい風景を作り出す文化を育んできたが、それは気の遠くなるほどの時間をかけて、少しずつ自然条件と折り合いをつけながら進めるという世代を超えての根気のいる努力の賜物でもある。それでも、人里離れた所に生きる野生生物等々のことまで考えられるだろうか。新型コロナウイルスの元の宿主は森奥深くの洞窟で暮らすコウモリという。持続的であろうとも開発は新しい病原体を作り出してもいるようだ。温暖化で氷河や永久凍土が解け始め、閉じ込められていたものが人類の脅威にならないことを祈りながら、しかし相応の覚悟と準備が必要であろう。

今、WHO、FAO、OIEの三つの国際機関が獣共通感染症の克服に向けて力をあわせようとしている。抗生物質や殺菌剤等をてんでばらばらに大規模に実行した結果、薬剤耐性菌を生み出し、優れた薬剤を失う羽目に陥っている。異なる目標の組織を糾合する道具に「One World, One Health」を利用する。多種多様な価値観や目的の異なる組織をもう一つ大きな枠組み概念を旗印にすることで、知恵を協力的に引き出し、まとめあげることができる。「One Health」もその一つだが、「リスク」も「安全」もその類の概念である。日本人には「危険」と関連の深い「リスク」の言葉は苦手。欧米社会はその逆で、「安全」より「リスク」の方がピンとくるらしい。彼らは「自由」や「平等」などの「権利」を、自らの血を流して獲得してきた歴史を持つからなのか？「危険」「安全」は生き残るうえで重要な概念であり、「あぶない(危ない)」の和語には「危」を当てる。「安」は和語「やすらか、やすんずる」に当てる漢字ではあるが、「安全」に対応する和語はない。使いこなすにはその違いの理解が必要なのである。

(関西大学名誉教授 辛島 恵美子)

第8回生存科学シンポジウム 開催
「コロナ禍 医療・ケア現場の語り」

専務理事 竹下 啓

第8回生存科学シンポジウム「コロナ禍 医療・ケア現場の語り」を2022年1月30日(日)にオンライン(Zoom webinar)で開催したことをご報告いたします。

2020年1月に日本で初めて Coronavirus disease 2019(COVID-19)の患者が確認されて以来2年あまり、生存科学研究所もパンデミックの影響を大きく受けてまいりました。2013年12月14日に第1回を開催以来、毎年恒例の大切な行事となっている生存科学シンポジウムも、2020年度は断念せざるをえませんでした。

COVID-19 パンデミックをめぐり、生存科学研究所は2021年3月刊行の『生存科学』において、「パンデミック—新型コロナウイルスへの対策と展望」を特集し、宗教学、教育学、公衆衛生学、経済学など幅広い分野の論文を掲載しました。今回のシンポジウムでは、医療・ケアの「現場」で COVID-19 パンデミックに直面した人たちに、生の声を伝えていただくことに主眼を置きました。企画段階では、できればパンデミックを振り返るシンポジウムになることを願っていましたが、結局のところ、第6波の感染拡大の中での開催となりました。

さて、初めてのオンライン開催となった第8回生存科学シンポジウムは、180名以上のみなさまに視聴していただくことができました。おそらく過去最多であったものと思います。国民一人ひとりが当事者である時宜を得たテーマであることやオンライン開催であったこともありますが、やはりご登壇いただいたシンポジストのみなさまのお力がとても大きかったと思います。この場を借りて御礼申し上げます。



写真1:山崎元靖様

済生会横浜市東部病院で救命救急医として重症 COVID-19 患者の対応にあたりながら神奈川県内の医療体制の構築に尽力されている山崎元靖さん(写真1)は、ダイヤモンド・プリンセス号の対応

で風評被害に遭遇したこと、第5波での入院トリアージにおける倫理的葛藤の経験、そして第6波の最

新の状況について率直にお話しいただきました。医療需要と供給が著しい不均衡になっているパンデミックはまさしく災害であるのに、自然災害と異なり「見えない災害」であることに困難を感じたと語られたのが、特に印象的でした。



写真2:高柳克江様

看護師の高柳克江さん(写真2)は、介護老人保健施設で介護と看護の責任者をされています。2020年1月、第3波で医療機関のサポートが十分に得られない状況の中で、施設で COVID-19 のクラスターが発生し、3名が亡くなりました。COVID-19 パンデミックの怖さが、高齢者を含む脆弱な人たちの命を奪うことにあるのだと実感しました。重症者について救急隊から「本当に入院させるのですか」と問われて、「お願いします」と答えたこと、そしてその後、その人が無事に退院してきたというエピソードからは、年齢で入院トリアージすることの問題を提起されたように思います。



写真3:佐々木淳様

佐々木淳さん(写真3)は在宅医療の専門家です。自宅療養者の医療支援に尽力されるだけでなく、現場からの情報発信や全国の医療体制の整備にも奔走されています。入院できない人に対する代替手段として在宅医療を消極的に捉えるべきではなく、生活の継続の中で医療を提供できる点が高齢者への医療においては強みになるというお話に感銘を受けました。入院すれば安心かもしれませんが、特に高齢者では入院による ADL の低下が避けられません。パンデミックの後にも急性期医療における在宅医療の役割が大きくなるかもしれません。また、COVID-19 で自宅療養となった場合には、主治医がいないまま時間が過ぎて行くこともあり、在宅医療がいわば「在宅入院」として機能することの利点についてもなるほどと思いました。さらに COVID-19 が社会的に弱い人たちほど支援を受けにくい問題や、COVID-19 パンデミックでアドバンス・ケア・プランニング(ACP)が求められた一方で適切とは言えない意思決定支援もあった問題にも言及がありました(ACP については山崎さんも指摘されていました)。

永山新一さん(写真4)は会社経営者で、ふだんはゴ



写真4:永山新一様

ルフやサーフィンを楽しむスポーツマンです。第5波で医療へのアクセスが大幅に制限された(ご本人曰く「行政も含め、全てが超テンパってしまっている」)中、酸素飽和度

80%台の状況を自宅で克服されました。永山さんは身体的にも、社会的にも決して脆弱な立場にあったわけではありませんが、結果的に医療のサポートを受けることができませんでした。発熱外来や地域の基幹病院に受診を打診しても、「地域医療を守るためにご理解ください」と受診を拒まれた体験を話されました。自分で購入したパルスオキシメーターを見ながら呼吸の方法を工夫されたそうで、独自の方法についても紹介されました。

シンポジストの報告の後、zoomのQ&A機能で一般の参加者のみなさんから質問をいただきながら、パネルディスカッションを行いました。(写真5)医療従事者からの非科学的な情報発信などに対する疑問など幅広い話題がありましたが、十分に掘り下げる時間がなかったのが残念でした。



写真5:パネルディスカッション(会場)の様子
竹下専務理事(司会)・佐々木様・永山様・高柳様

シンポジストのみなさんの報告内容は『生存科学』にご投稿いただくことになっていますので、会員のみなさまはぜひご覧になってください。COVID-19のリアルを伝える貴重な資料になるはずです。

2022年度 事業計画

I. 事業方針

当研究所は、人類のより健全な生存の形態ならびに機能に関する総合的、実践的研究によって生存科学の確立と発展を目的とする。そのため総合人間科学としての生存科学は、縦割りの学問ではなく、哲学、倫理学、法学、社会学、経済学、生命科学、環境科学、医学・医療学等の諸科学の視点をも併せた、健康科学の立場から総合的な、生存モデルの確立を

図ってきた。また、人類の健康な生存秩序を確保するため、生存科学に関する研究および普及啓発のための事業を推進し、公益に資することを願うものである。

2022(令和4)年度の事業計画については、これまでの取組み、理念を踏まえ、助成規模を維持し、当研究所らしい研究支援、自主研究事業、助成事業を中心として、人間のライフサイクルをとおしての総合的な健康投資(バイオ・インシュアランス)モデルの確立と、そのための医学・生命科学の革新・推進に取り組む。また、研究の成果や方法などをインパクトある形で社会に発信・普及させるとともに、社会貢献に努める。

II. 事業運営について

当研究所の組織の形態に基づき、各事業等の進捗状況、運営状況についての動向を常に確認し、相互に連携しつつ、当研究所の理念である「生存の理法」を確立するとともに、社会貢献活動への取組みを推進していく。

自主研究においては年度途中で研究責任者に対してヒアリングを行い、事業の適切な実施に向け、助言、評価を行う。研究成果については、シンポジウム、市民公開講座、学術誌「生存科学」を通じ、研究成果の公表に努める。

また、自主研究事業、助成研究事業の研究責任者、申請者等に当研究所の事業計画、研究費不正使用・不正受給および研究活動の不正行為防止、研究倫理等の研究活動方針を周知するなどの機会を年度初めの早い時期(5月中旬)に企画、採択された研究者間の交流会を含め実施する。

コロナ禍の状況にあつて事業運営が円滑に推進できない場合には、Zoom等のオンライン会議等を活用し、対応していく。

当研究所の活動状況および今後の予定についてホームページの充実活用、個人情報に配慮しながら賛助会員のメーリングリストを活用し、より一層の普及活動を行う。

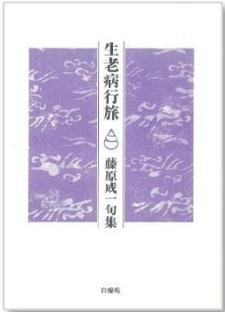
事業内容の詳細については、[公益財団法人生存科学研究所のホームページ](#)に掲載いたします。



本の紹介

四苦と向き合う

『生老病行旅—藤原成一句集』



初春、上記の私家版句集をつくりました。高度経済成長以降、医療が科学技術依存、経済合理性優先色となりました。現代の医療は科学技術医療技師と人間洞察治療医師の二つに大別される時代です。

しかし、古風にも、大正から昭和初期にかけて、公私の医療・医学の現場と、患者の立場から、すぐれた俳人にして医師、俳人にして患者が輩出しました。医師俳人水原秋櫻子、患者俳人山口誓子などは俳壇のリーダーとして多くの俳人医師を育て、生の発見という句の新境を導きました。医は慈悲の目と心で人間を見守り、生の表情を観察し、対話を生む仁学・仁術とされ、生の営みへの優しい観察、生命への洞察は、医の本道でした。患者の立場でも同様です。そこに、いのちの機微を読みとる俳句が伴侶となって生長していきました。

私も学術誌『生存科学』の編集人の後半期、長期大病、頻繁な急患に冒され「生存」の考察と同時に、生老病死に向き合い、四苦をかみしめてきました。そこに苦吟のような吟がこぼれ出、句となりました。医でも病いでも、生を見つめさせ、生の動静を感じさせ、心身を仁愛へと導いていきました。古医術の仁学は、あるいは現代医療批判の片隅にひそんでいるのかもしれませんが。医は自他の対話学、人間学です。医の慈悲ある対話を忘れ、四苦と向き合うことを避けがちな昨今、苦吟が仁への誘いとなることを期しています。

私事で恐縮ですが、句集『生老病行旅』ご希望の方は、生存科学研究所事務局へお申し込みください。
(常務理事 藤原成一)

申込方法：E-mail、Fax、郵便などで、『生老病行旅』の希望部数、送り先ご住所、お名前をご記入の上、事務局までお申し込みください。本は無料です。送料をご負担いただきます。

代 金：送料分を切手にてお支払いください。本に同封の返信用封筒に切手を入れてご返

送ください。

1部 180円、2~4部 370円

申込先：〒104-0061 東京都中央区銀座4-5-1

聖書館ビル

E-mail: office@seizon.or.jp

F a x: 03-3567-3608

研究会等日報

- 1月11日(火) 選考委員会開催
- 1月13日(木) 「森とレジリエンス—地域の再生—」研究会
- 1月20日(木) 健康価値創造研究会
- 1月30日(日) 「第8回生存科学シンポジウム」オンライン開催
- 2月10日(木) 介護現場をIT技術で効率化するための調査・開発研究会
- 2月22日(火) 常務理事会開催
- 2月24日(木) みらいエンパワメントカフェ不登校児の理解と支援～学校における親子のエンパワメント～
- 3月7日(月) 健康価値創造研究会
- 3月10日(木) 編集委員会開催
- 3月13日(日) 医療・福祉・教育におけるサービス利用者側のモラル意識と葛藤の実験研究会
- 3月18日(金) 理事会開催
- 3月25日(金) 2022年度自主研究事業(若手研究者)の募集を開始(3/25-4/28)
- 3月27日(日) 東京慈恵会医科大学臨床倫理セミナー(助成研究)
- 3月31日(木) 「森とレジリエンス—地域の再生—」研究会
- 4月8日(金) 「アドバンスケアプランニングの議論からわが国の患者主体の医療を再考する」研究会

